

1 5 2 センチ 6 2 キロの恋人

目 次

1 5 2 センチ 6 2 キロの恋人 ……… 5

立花逸人、〇〇を自覚する。 ……… 261

1 5 2 センチ 6 2 キロの恋人

人間というのは、二通りの人種に分かれていると私は思う。どう分かれているかという点、異性にモテるかモテないからだ。

そういう私、森下美奈は、生まれてからの二十三年間、モテないほうに属している。

私はどこにでもいる平々凡々な顔に、身長一五二センチ体重六十二キロというチビデブだ。

お腹は出てないけれど、ウエストのお肉がちよっと（かなり？）摘めてしまうし、どんなにこれ以上育つと願っても成長をやめなかった胸は、今ではFカップになってしまった。

そしてムチムチとしたお尻と太腿……。どれだけ必死にやつても効果のなかったダイエットの数々に、これまで何度も泣いてきた。

茶色い猫っ毛はふわふわとしていて、一年を通していうことをきいてくれたことがない。何度かストリートパーマとかも試してみたけど、頭皮がかぶれて酷いことになったから諦めた。今では肩先より少し伸ばしたあたりで切り揃えて、縛って纏めることで何とか形を整えている。

……つまり、何も自慢できるものがない見た目をしているのだ。

無駄についているお肉のせいで、小さい頃は周りから虐められることもあった。学校で虐められ

るのが辛くて、毎日家で泣いていた私に、ある日、母は言った。

「馬鹿にされるのが嫌なら戦え。泣くだけなら誰でもできる。どうしたら現状を打破できるか考え、そして行動しろ。だが忘れるな。馬鹿にされたのが辛かったのなら、美奈は決して人を馬鹿にするな。悪口を言われて悲しかったのなら、美奈は決して人の悪口を言うな。いいか、美奈の身をきちんとしてくれる人は絶対にいる。その人に出会えた時に、失望されない自分にいるんだ」

そんな私たちを見て、年の離れた兄たちは、小学生になんてことを言うのだ母よ、と頭を抱えていた。

言われたことがよくわからず泣き続ける私を、母はきつく抱きしめながら、「それでも駄目だった時は、必ず母が助けてやるから」と言った。

（戦うってどうやって？）

それから毎日毎日、母が言ったことを考えたけど、どうすればいいのか全然わからなかった。

そんな時、兄たちと見ていたテレビ番組で、私は衝撃を受けた。

その時やっていたのはよくあるバラエティー番組で、そこには私よりも太っているタレントが出演していた。その彼女が言ったのだ。

「暗いデブは嫌われるけど、明るいデブは好かれる」

それが全てではないだろうけど、その時の私はこれだと思った。

それからは常に笑顔を心がけた。楽しい時はもちろん、虐められても全然気にしてないと笑って過ごした。そうして、自分なりの戦いを始めた。

何を言われても何をされても笑っている私を、最初はさらに馬鹿にしていた虐めつ子たちは、次第に私を虐めることをやめた。多分私の反応がつまりなくなっただろう。こうして始まった私なりの戦いは、社会に出ても続いている。

第一話 変態はチャンス逃がさない

(……雨?)

ザアーツという音を目覚ましに、ゆっくりと目を開ける。部屋の中はまだ薄暗かった。

今何時なのか知りたくて、寝起きでぼんやりとしたまま、携帯を探すけど見つからない。ただ、カーテンの隙間から見えた外は明るくて、もう日が昇っているのがわかった。

朝かあ……と思いながらカーテンを開けるために上半身を起こす。その瞬間、下腹部に鈍痛がはしった。同時に、大事な部分からコポツと液体が流れ出る。

そんな体の違和感に、あれ? 生理がきたかな? ショーツとベッドを汚しちゃうっと思い、慌ててベッドから降りようと床に足を着ける。が、立とうとしても膝に力が入らず、そのまま床に崩れ落ちてしまった。

(えっ? 何? っていうか……えっ、なんで私、裸なの!?)

今の行動のせいで、下半身からはさらにコポツと液体が流れ出ていた。そんな状況と、下着もつけていない自分に混乱しながら、なんでこんなことになっているのかと、私は昨夜のことを必死に思い出そうとした。

昨日は花の金曜日。私が所属する総務部、そして営業一課・企画二課の合同飲み会の日だった。うちの会社では部を跨^{また}いで親睦を深めようと、半年ほど前から月に一度、色々な部署と合同で飲み会が開かれている。

ちなみに、この飲み会の発案者は我が社の社長の奥様らしい。

昨今の結婚率の低下を嘆いた奥様は、まずは出会いが大事だと思い、社員たちに出会いのきっかけを与えてはどうかと社長とその周りの方たちに提案した。上司からそれを聞いた独身社員たちが乗り気になり合同飲み会を企画したものが、いつの間にか毎月の行事になってしまっているそうだ。私が勤めているのは貿易、建築、電気機器など……様々な業種で成功を収めているMTグループの本社だ。当然、将来有望な男性がたくさんいる。そのため独身の女性陣は、この飲み会にいつも気合十分で挑むのだ。

昨日の飲み会には営業部長の立花^{たちばなはやと}逸人さんも来るということで、女性陣の気合の入り方も桁^{けた}違いだった。

立花部長は我が社一の人気者。エリートコース必須の海外支社への転勤を二度経験し、半年前にイタリアから帰ってきたばかり。黒い髪に濃茶の瞳、ほりが深く、精悍^{せいけん}さと優しい性格が表れている顔は、芸能人にも負けないイケメンぶりだ。細身でありながらも、スーツがとっても似合う、がっ

しりとした体の持ち主。仕事面では厳しくも優しい人格者で、理想の上司だと男女問わず慕われている。現在三十六歳、独身。狙われないほうが不思議という男性だ。

……実は私が、身の程知らずにも好きになってしまった人でもある。

四ヶ月ほど前のある日……月末の処理と月初の処理が重なった時があり、総務部の経理課全員が残業をしていた。覚悟はしていたけどなかなか終わらず、とうとう二十時半を越えたあたりでみんながお腹がすいたと騒ぎ出した。そこで、ちょうど区切りのよかった私が、コンビニに買い出しに行くことにしたのだ。

みんなからあれが欲しい、自分にはこれを買ってきてくれと頼まれるものをメモしていると、一緒に残業していた先輩の由理^{ゆり}さんが、「私も一緒に行くわ」と言ってくれた。

頼まれた量も量なので、とっても嬉しかったんだけど……そんな由理さんを周りの男性陣が止めた。「こんなに暗くなつてから女性が外を出歩くのは危ない」

「今日は特に寒いし、風邪をひいちゃいますよ」

などなど……。由理さんは私と違うモテる人種。美人でスタイルが良く、おまけに性格もとってもいい人。私もよくお世話になっている大好きな先輩だ。今も「なら美奈ちゃんじゃなくて、あなたたちが行ってくれるのよね？」と、迫力のある笑顔で男性陣に言ってくれている。由理さんは課内の人たちの私への対応に、よく怒っているから……

この時も、男性陣は笑いながら反論した。

「いやいや、森下は女じゃないから平気だつて」

「そうですよ、本木^{もとぎ}さんは心配しすぎですつて。こいつを襲ったら返り討ちにされますよ」
なあ顔を見合わせて笑っている彼らに悪気はない。……たぶん、きつと。

「あんたたちっ」

「ほんとですよねつ、由理さんは心配しすぎです。じゃあ私、行つてきまゝす」

こういう扱いに慣れているからといって辛くないわけじゃない。怒鳴り声をあげようとしてくれた由理さんの袖を引っ張つて止め、へらつと笑うと、私は財布を持つてその場から逃げ出した。

うちの会社の近くには、コンビニが三つある。あえてその中で一番遠いところを選んで、頼まれた食料や飲み物をカゴいっぱい買った。大きな袋を両手に持つて会社に戻りながら、心の中で必死に平常心平常心と唱える。

(気にするな、いつものことだ)

その時、背後から声をかけられた。

「もしかして森下さん？」

その美声に一瞬、ある人进行い浮かべた。まさかねと思ひながら振り返ると、そこにはまさかと思つた人物——黒のコートを着た立花部長が立つていた。立花部長とは、一度由理さんと一緒に社食にいた時に、自己紹介のような会話をしたただだったから、まさか名前を覚えてもらえているとは思ひなかつた。だから余計に驚いた。数メートル先に立つてゐる立花部長は、ポカンとしている

私の顔を見ると、眉間にしわを寄せた。

「やつぱり森下さんか。そんなに荷物を持つてどうしたの？ それにコートは？ まさかその格好で会社からここまで来たの？」

「あ……の。今日うちの課、全員残業で。まだかかりそうなので私が買い出しに来たんです」

「買い出して一人で？ ああ、ちよつとそれを置いて」

そう言いながら足早に目の前までやつてくると、私の両手の荷物を地面に置かせた。そして、自分が着ていたコートを私にかけてくれる。

「こんなに手が冷えて……寒かつたろ？ これを着なさい」

「だ、大丈夫ですつ。私、お肉が厚いので寒さを感じないんですつ」

「何を言つてるの、そんなわけないだろう。女の子なんだから体を冷やしてはいけないよ。いいから着なさい」

そうして私に着せたコートの前ボタンを留めると、地面に置いてあつた荷物を持つて歩き始めてしまふ。慌てて追いかけて荷物を返してもらおうとするけど、絶対に渡してはくれなかつた。

「あのつ、立花部長に持つてもらうわけにはいかないですつ」

「何を言つてるの。こんなに重いものを君に持たせるわけじゃないでしょう。まったく……総務の男どもは何をしているんだ」

「いえ、私が自分で行くと言つて……」

「それでもこんな時間に女の子を一人で買い出しに行かせるなんて……何かあつたらどうする気な

んだ」

『女の子なんだから』『女の子に』

そんなことを家族以外の男性に言われたのは、生まれて初めてだった。私のことを女の子として扱ってくれるなんて……。立花部長がみんなに人気がある理由が、よくわかった。

気を抜いたら裾を地面に擦ってしまいそうなほど大きい男物のコート。その温かさに、涙が出そうになるのを堪えながら歩く。

会社のロビーに入ったところで、後ろから私を呼ぶ声がした。振り返ると、顔を真っ赤にした由理さんが走り寄ってくる。

「ごめん美奈ちゃんつ、急いで追いかけたんだけど、どこのコンビニに行つたのかわからなくて……。ローモンかなと思って行つてみたんだけど、美奈ちゃんいなくて……。ああっ顔が真っ赤よ？ 寒かったでしょう？ ダメよつ、ちゃんと上着を着ていかないと！」

そう言うと、手にしていた私の上着を着せてくれる。すでに立花部長のコートを着ているのに、その上にさらに着せられ、いつも以上に丸々としてしまったけれど、由理さんの優しさが嬉しくて嬉しくて堪えなかった。

「ありがとうございます、由理さん。ローモンよりエイトの気分だったんでそちに行つてました。でもコンビニから帰る途中で立花部長と偶然会いまして、ここまで荷物を持ってもらえたので……」

「立花？ あつ、ホントだ。あんたいつからそこにいたの？」

「最初からいた。いいからほら、行くぞ」

結局、立花部長は、総務部まで私が買い込んだ荷物を運んでくれた。突然の立花部長の出現に驚く男性陣に、「夜の買い出しに女を行かせるような男はモテないぞ」と、チクリと皮肉を言う。

そうして帰っていく後ろ姿を見ながら、私は身の程知らずにも胸のときめきを抑えられなかった。それから同じようなことが何度かあった。

段ボールを運んでいたら、「こういう力仕事は男性に助けてもらいなさい」と手伝ってくれた。

残業で遅くなった日にたまたまロビーで会った時には、「もう暗いから送っていくよ」と駅まで一緒に歩いてくれた。その度に、部長に対しての憧れが募っていた。

そして今、それは間違いなく恋心へと変わっていた。

飲み会は、コップ一杯のビールで酔ってしまう私には辛い場所だ。……それ以外にも辛い理由はあるけどね。

私の予想どおり、立花部長は開始早々、女性陣に囲まれていた。そこから抜けて男性陣にまぎつても、すぐに違う女性たちがその周りを囲む。そんな姿を、私は由理さんと隔つこで飲みながら見ていた。

これが私があまり飲み会に来たくない理由の一つ。立花部長を好きな人はいっぱいいるって知っていても、実際に見るのは結構辛いから……

立花部長と同期である由理さんは、彼女たちを見て「相手にされてないのに、よくやるよね」と毒を吐いていた。

立花部長と由理さんは仲が良く、二人にはよく、付き合っているんじゃないかと結婚するんじゃないかとかの噂が出る。そんなわけで立花部長ファンの女性社員に、嫌がらせをされることが多い由理さんは、立花部長ファンの女性に厳しい。

私も最初の頃、二人が付き合っていると思っていたから、「本当のところ付き合ってるんですね？」と聞いたことがある。けれど由理さん曰く「あいつだけは嫌、人類最後の二人になってもありえない」らしい。美男美女でお似合いなのに……と言うと、由理さんはニヤツと笑いながら何かを小声で呟いた。

「美奈ちゃんにそう思われていると知ったら、あいつどうなるかしら……」

よく聞こえなくて聞き返したけど、由理さんは笑うだけで教えてくれなかった。

しばらく二人で飲んでいたけど、由理さん目当てに他課の男性たちがやってきたので、トイレと称してこっそり抜け出し、廊下の隅にあるソファで休むことにした。同じ課の酔っ払いたちに絡まれて、いつもよりも急ピッチで飲んだから、今日はもう私の許容量を随分超えている。

ふうつと息を吐き出しながら目を瞑って、綺麗な女性に囲まれている立花部長の姿を思い出す。

(やっぱり人気があるんだなあ。私も由理さんみたいだったら……彼女にしてくれたかな……)

私は今まで男性に、女性として見てもらえたことがない。どんなに仲が良くなっても友達止まり。憧れていた人や気になっていた人に、恋愛相談や橋渡しを頼まれたこともたくさんある。

それでも一度だけ勇気を出して、告白をしたことがある。中学生の頃、初めて本気で好きになったその人には、「は？ 冗談だよな？ 俺、お前を女と思ったことがない」という返事をもたらった。

そのあとそのことをクラス中に知られて、私は卒業までからかわれ、仲の良かったその彼には目も合わせてもらえなくなった。

この時、やっぱり私は異性からはよくて友達止まりで、好きだとかそういう感情を持つことすら相手にとっては迷惑なんだと思った。

それに……自分で決めたことだけど、どんなに辛くても周りと一緒に笑ってしまう自分も嫌になった。みんなの前では一緒になって自分を笑い、家で一人泣きながら考えた。

(恋愛っていうのは、私みたいな見た目の女には遠い世界のことなんだ)

バカみたいだけど、その時の私は本気でそう思った。世の中、見た目で恋愛していない人だっていっぱいいるのに、たった一度の失敗で、私は恋愛することを諦めた。

ただ私には、私が馬鹿にされたりした時に、私の代わりに怒りをあらわにして泣いてくれる友達が二人もいたから、それで十分かな？ と思った。恋愛なんてしなくても、大好きな友達がいれば、まあまあいい人生なんじゃないかな、と。

お見合いは、隠れ人見知りの私にはハードルが高いから、結婚も諦めた。だから短大を出てこの会社に入れた時はホッとした。これで人生安泰だ、と。

それでも恋をしないというのは無理で……中学生以来、初めて好きな人ができた。それが立花部長だ。

社内でも……いや社外でもより取り見取りだろう立花部長と、どうにかなるなんて想像したこともない。ただ……家族以外で初めて、私を女の子として扱ってくれた立花部長を、秘かに好きでい

るくらいは許してほしい。絶対に迷惑をかけるようなことはしないから。

そんなことを考えながらうつらうつらとしていた時、耳元で予想外の声がした。

「もしかして、森下さん好きな奴がいるのか!？」

「え？」

驚いて声のほうを向くと、何故か立花部長がすぐ横に座っていた。

（なんで立花部長がここにいるんだろ……？ あんなにたくさんの女性陣に囲まれていたのに……。そっか……。私はだいたい酔っているんだな……。頭が半分寝ているんだ。起きながら夢を見るなんて、なんて器用なんだろ、私）

そんなことを考えながら、ボーツと立花部長の顔を見ていると、部長がなんだか必死な顔をして私に詰め寄ってきた。

「教えてくれ、森下さんが好きな奴は誰なんだ!？」

「好きな人……ですか？」

「いるんだろ？」

「います……。けど部長には内緒です」

せっかくだしい夢を見ているのに、本当のことを言っただけで夢の中でまでふられたくない。

そう思っただけで言ったのに、部長はしつこく食い下がってくる。

（ちよ、ちよと立花部長つ、いくら夢でも顔が近いですつ）

「なんで内緒なんだ？ 俺が知っている奴なのか？ 誰なんだ？」

井上課長か？ 企画の川崎か？

それとも営業部の人間か？」

「秘密ですつて」

「頼むから教えてくれ！ どんな奴なんだ？」

「名前は秘密ですけど……とっても優しい人です」

教えないで言っているのに、何度も何度も聞いてくるから、結局ちよとずつ答えていってしまう。……近すぎる顔の距離にテンパっていたせいもあるけど。

「うちの会社の人間か？ 背は？ 顔はどうなんだ？」

「うちの会社の人です。背も高くてかっこいいです。とってもモテる人で、由理さんともお似合いです……。だから私は見ているだけで満足なんです」

「由理……本木と……そうか……」

「はい」

「森下さんは……なんでそのことを好きになったんだ？」

「優しくしてくれたんです……。初めて私のことを女の子って言ってくれた男の人なんです……」

「そんなの当たり前じゃないかつ、森下さんとはとても可愛い女の子だよっ！」

「ありがとうございます」

立花部長は夢の中でまで優しい……。おかしいな……。もう夢を見ているのに、さらに眠くなってしまいました。会社の飲み会で寝るなんてダメなのに……。起きなきゃいけないのに……。ダメだ……

眠い……

「告白する気はないの？」

「ふられるのはわかっていますし……それに私、恋愛は諦めているんで……。ホントは一度くらい……デートとか……いろんなこともしてみたいですけど……」

「じゃあ俺としようっ、デート。……それ以上でもいいけど」

「ふふっ。部長、私なんかでその気になるんですか？」

「もちろんっ！むしろお願いしたら抱かせてくれるなら、今ここで土下座だってするさっ」

「ほんとに優しいですね。……ふふっ、そんなのこっちからお願いしたいですよ……」

「なら今夜……これから俺の部屋に来てくれる？」

「はい……嬉しい……です。いい思い出になりますね……」

そう答えたあと、私は夢も見ない眠りに旅立った。

「……ん」

「起きた？そろそろお預けが辛いよ」

その言葉と一緒に、閉じた瞼に何か柔らかいものが触れた。それが何かはわからなかったけど、近くに誰かがいるのはわかったから、渴いた喉を潤すものが欲しいと頼んだ。すると、すぐに唇に何かが触れる。うっすらと口を開けると、ぬるめの水が流れ込んできた。

少しずつ注がれるそれじゃ足りなくて、もっと欲しいと口を大きく開けると、小さく笑う声が

聞こえた。

そのあと、何度も水を飲ませてもらった。

ようやく満足すると、今度は柔らかくて力強い何かが、にゅるっと口の中に入ってきた。それは私の舌を絡めとり、口内を縦横無尽に動き回る。息苦しさで頭を振ると、私の口を占拠していたものはあっさりと離れていった。

足りなくなった酸素を、呼吸も荒く取り込む。すると今度は、耳たぶを温かく湿ったものが包んだ。くすぐったさに体が震えた直後、耳元で大好きな人の声がする。

「キスも初めてだった？嬉しいよ。これからたくさん練習しよう……」

「……え？た、ちばなぶちよ……？」

「逸人って呼んで。……可愛い耳たぶだね、ピアスの穴、あけてないんだ」

「母が……嫌がるので……私も痛いのは嫌いですし……」

「痛いの嫌いなんだ……？じゃあ嫌われないように……優しく……時間をかけて溶かしてあげよう……」

耳元でピチャピチャと音がするのを聞きながら、ああ、私はまだ夢を見ているんだな、と理解した。随分自分の願望が入ったりアルな夢だなと思いつつも、どうせならこのまま最後まで覚めないでほしいと思った。

立花部長は何度も私にキスをした。

口の端から含みきれなかった唾液だえきが流れていくと、それを部長の舌が追っていく。大きく開いた口で、肉食獣が獲物を捕らえるように私の喉元に口付け、ジュルツと音を立てて舌で舐めて、軽く歯を当て刺激する。

一瞬ぞわつと足から頭まで震えが走る。次の瞬間、足の付け根から何かがとろつと流れた。

丹念に首を舐め回していた舌は、次に鎖骨に向かうと、何度もそこを食みは、吸い上げる。その間に立花部長の両手は、私のスーツとその下のシャツのボタンを外していった。

現れたブラを上へずらし胸を外に出すと、両手で私の贅肉ぜいにくの塊である胸を優しく揉みながら、その頂いただきを口を含む。お風呂で洗う時くらいしか触れたことのないその部分を、部長の舌で転がされ、歯で軽く噛まれると……下腹の奥が熱くなった。

「……んっ……っふ」

「気持ちいい？」

「わからな……お腹が……熱いです……」

「可愛いっ」

その言葉と共にまた口を塞がれる。部長はそのまま両手で胸を揉んでいたけど、やがて片手をお尻のほうへと下ろしていった。

何度もお尻を撫でたあと少し体を離し、ゆっくりと私の服を脱がしていく。さすがにショーツを脱がされるのは抵抗があったけど、どんどん動きを激しくしていく部長の舌に翻弄ほんろうされているうちに、足から抜き取られていた。

唇を解放されたあとも、激しかったキスの余韻にボーっとしてしまう。ふと気付くと、私の両足の間に部長が収まっていた。

部長に両太腿を持たれて腰を上げられ、お尻の下にクッションを入れられる。大事な部分を部長に突き出すような格好が恥ずかしくて、拒否の言葉と一緒に暴れてみたけど、部長は決して私の太腿を放してくれなかった。更には信じられないことに、私の秘所にゆっくりと顔を寄せていつてしまう。

「いやっ、そんなとこ見ないでっ」

「何故？ とっても綺麗で可愛いのに……」

そしてペロツと一舐めする。まだ乾いているそこを、部長の肉厚な舌が何度も上下に舐め上げる。ひだが合わさり固く閉じたそこをこじ開けるようにして舌を押し込まれ、震える秘芯に鼻で軽い刺激が与えられた。

「ダメッ！ やだあつ」

どうにかして部長の舌をそこから離そうともがいたけど、宙に浮いている足がバタバタと動いただけだった。体全体で抵抗すると、何故か部長の顔が私の秘所に余計に押し付けられてしまう。涙目で部長の頭をグイグイ押していると、小さい笑い声が聞こえ、やっと立花部長が頭を上げてくれた。「そんなに嫌？」

「当たり前ですっ、そんなとこっ、そんなっ、きたないのにつ、ぶ、部長が汚れちゃいますっ」

傲慢じゃないが、私の性知識は保健体育止まりだ。あんなところを舐めしゃぶられ、舌を突き入

れられるなんて信じられなかった。そして、そうされると下腹の奥から何か溢れ出してしまい、ぐちゅっと音がするのが堪なく恥ずかしい。

部屋中に響く音も、あんなところを大好きな人に晒しているのも、お腹の奥から込み上げてくるよくわからないものも、全部が恥ずかしくて……

「汚れる？ 俺が？」

目を丸くしたあと、立花部長がとても楽しそうな笑い声を上げた。私はなんで笑われるのかわからないながらも、少しずつお尻をクッションからおろして距離をとろうとする。

「美奈のここは綺麗だって言っているだろう？ 俺のせいで美奈が汚れることはあっても、美奈のせいで俺が汚れることはないよ。むしろ、俺ので美奈が真っ白に汚れるところを見たいくらいだ……」後半は部長が顔を伏せてしまつてあまり聞こえなかったけど、何だか聞き返すのが怖くて、何も言わずにじりじりとお尻を動かし続けた。……なのに、勢いよく顔を上げた部長はにっこり笑うと私の太腿を掴み、グイッと一気に引き戻して私の努力をゼロにしてしまう。

「ふえっ!？」

「美奈、俺から逃げるのは駄目だ。……優しくしたいんだ、だから煽らないでくれ」

「煽ってないですつ、ひゃつ」

再びあの恥ずかしい姿勢に戻され、部長にゆっくりと太腿を舐め上げられる。左の膝の近くから、段々と私の秘所に近づいた舌は、もう少しで触れるというところで右の太腿に移動した。持ち上げた私の足に舌を這わせながら、部長は私の目をまっすぐに見つめている。

恥ずかしくて怖くて、目を背けたいのに、私は何故か動けなかった。両手を口の前で合わせ、まるで祈りをささげるような格好のまま、部長と見つめ合つてしまう。

何もされていない秘所が、部長の息遣いに反応するようにピクピク動くのが自分でもわかった。何度目かの接近のあと、部長の舌が秘芯を舐めた。軽く歯を当てながら舌で優しく擦られる。

「ひゅっ、い、やつ、やだっ」

体中のぞわぞわが増してしまう。それが嫌で何とか腰を動かしていると、部長は私の足をさらに広げて内腿を押さえつけ、まるで楔を打ち付けるかのように私の膣に舌を押し入れた。

舌で膣内をグリグリ刺激され、何度も舌を出し入れされた。もう嫌だ、やめてと何度もお願ひしたのに、部長は私の秘所からなかなか顔を離してくれない。

ようやく部長が顔を上げてくれた時には、私の顔は涙と涎でそれは酷いものになっていたと思う。それなのに、部長はそんな私を可愛いと言って、嬉しそうに目じりにキスを落とす。

「痛かったら言うんだよ？」

そう言うと、部長は私の秘所に指を一本突き入れてきた。違和感はあるけど、別に痛いとは思わなかった。緊張に強張る私の肩を宥めるように撫でながら、部長は指を入れられた私のそこをジッと見つめる。

「大丈夫？」

「はい……」

「ならもう一本増やそうか」

その言葉に小さく頷く私を見つめつつ、部長はそのゴツゴツとした指をもう一本入れてきた。すると入り口でピリッとした痛みを感じた。

「いっ……」

「痛い？」

「大丈夫です」

本当に少しだけの痛みだったから、平気だと頭を振って答えると、部長は二本の指をゆっくりと抜き差ししながら、中でかき回すように動かし始めた。

「んっ、んっ……ふっ」

自然と漏れてくる声を何とか手で押さえていたのに、その手を外され部長の背中に回されてしまう。部長の顔を見上げると、優しく笑ってちゅっとうと軽いキスをされた。

「可愛い声を隠さないで……」

「可愛くないで……っすう」

「可愛いよ、可愛すぎて堪らない」

本気でそう思っているかのような蕩けんばかりの笑顔で見つめられ、ジワツと涙が滲んできた。(ホントになんて夢なんだろう。こんな幸せな夢なら、一生目が覚めなくていいのに……)

そう思いながら、部長の背中に回した腕に力を入れ、力いっぱい抱きついた。

部長は私を抱きしめ返してくれつつも、秘所に入っている指を容赦なく三本に増やす。みちみちと自分の中を広げられる感覚。小さな痛みと圧迫感から逃げようと浅い呼吸を繰り返す。そんな私

を注意深く見つめながら、部長は私の耳元でそつと囁く。

「大丈夫、ゆっくりやるから力を抜いて……」

「は、い……」

くちゅりと耳元から聞こえる音とその声で、自然と力が抜けていく。

丹念に耳に舌を這わせながら、部長は空いている手で胸の頂を摘んだ。ビクンツと体を揺らすと、宥めるように耳や唇にキスが落とされる。そうして力が抜けると、再び三本の指が私の中で蠢いた。しばらくすると、耳にキスをされていないのに、ぐちゅぐちゅという音が聞こえ始めた。その音をどこか遠くで聞きながら、私はこれまで経験したことのない感覚を追うのに必死だった。

(お腹の奥が熱い。熱があるのかと思うほど体中が熱い。体が勝手にビクビク跳ねてしまうのは、なんで？ もうよくわからない。この感覚は怖い。嫌、怖い。空中に投げ出されるようなこれは――)

次の瞬間、真っ白に塗りつぶされた世界に放り出された。

ああ、目が覚めるのかと思った。

でも、うるさい心臓を宥めながらゆっくり目を開けると、目の前には嬉しそうに私を見下ろす部長がいた。

「あれ……?」

「可愛いな、いっちゃったのか。気持ちいい?」

まだ終わリじゃなかったのかと思うと嬉しくて、思わず部長に抱きつく。すると、お返しのように優しく抱きしめられた。とても幸せな気持ちでいたのに、急にその体を離される。ビックリして

部長の顔を見ると、その顔は辛そうに歪んでいた。

「どうし……たんですか……？」

「ちょっと失敗したな、と思つてね。今日こんなことになると思つてなかったから、ゴムの用意がないんだ」

「……ゴム？」

「コンドーム」

「……えっ！」

「もったいないけど、ここまでかな……次の時はきちんと用意しておくから」

そう言つて、軽くキスを落として起き上がりとする部長の腕を、慌てて掴んだ。こんな夢を今度いつ見られるかわからないのに、そんなの嫌だつ。

「だ、大丈夫ですから最後までしてくださいっ！」

「でもそうしたら……妊娠しちゃうかもしれないよ？」

「あのっ、それはないから大丈夫なんですっ」

夢の中でいくら妊娠したつて、目が覚めたら元どおりだ。必死に大丈夫だからと繰り返す私をしばらく見つめたあと、部長は微笑みながらまた抱きしめてくれた。

戻ってきた温もりにホッとして抱きしめ返した時、耳元で微かに幻聴が聞こえた。

「安全日だったか……ついてないな」

（あの紳士な部長がこんなことを言うわけがないのに。私つてばこんな願望を持っているなん

て……目が覚めたあと会社で部長を見た時、まともな顔をしていられる自信がないな……）

恥ずかしくて部長の顔が見られず、視線を逸らしていると、部長が私のおでこに軽い音のするキスをした。そして「挿入^{挿入}れるよ？」と囁く。何も言えずに小さく頷くと、さっきまで部長の指が入れられていた秘所の入り口に、熱を持ったものが触れた。私の入り口の割れ目に沿つて何度か上下に動かされたそれが、ちゅぷつという音のあと、ゆっくりと押し込まれてくる。

（みんな初めては痛いつて言つていたけど、夢つて痛覚ないはずだし平気だよね……？ あれ？ でもさっきはちゅつと痛かった……あれ？）

次の瞬間、下腹部を襲ったあまりの痛みに驚いた。

（こんなとこまでリアルにしくてもいいのに！）

痛みを堪えるために思わずギュッと体に力を入れてしまう。部長は「……っは」と呻いたあと、私の顔を挟むように肘をつき、顔中にキスを降らしてくれた。

「美奈……、ごめん痛いよな？ なるべく痛まないようにするから力を抜いて？」

「こ、ごめん、なさい……」

「美奈が謝ることなんて何もないよ。ほら、キスをしよう？ 口を開いて……」

「ふっ……んう……」

言われたとおりに口を開くと、すぐに部長が喰らいついてきた。絡まる舌を部長の口の中に引っ張られたり、逆に自分の口に押し込まれたりする。それとタイミングをあわせるように部長の熱がちゅぷちゅぷと音を立てながら浅く出入りを繰り返した。

我慢できるけどちよつと痛い……、そんな抽送ちゆうそうを繰り返されるうちにだんだんと痛みが麻痺まひしてきて、体から力が抜けていく。

「美奈……このままゆっくり開かれるのと、一瞬痛いの、どっちがいい？」
「え？」

「一番容量があるところは入ったけど、まだ美奈の奥までは開ひらけてないから、もう少し辛い思いをさせてしまうんだ。だから美奈が選んで。このままゆっくりと時間をかけて開かれるか、一気に奪われるか……」

さすがに私でもその意味がわかった。今の時点でまだすべてが収まったわけじゃないって言われて、正直ショックを受けるほどにはいいっぱいだけ、この状況で辛いのは私だけじゃないはず。だって私を見下ろす部長のほうが、私よりずっと辛そうなんだから。

汗で濡れている部長の背中。そこに回した手に力をこめると、「一気にお願います……」と頼んだ。部長は、私のこめかみに唇を付けながら、「わかった。でも、できるだけ力を抜いているんだよ」と言う。私は深く息を吐いて頷いた。

何度も深呼吸を繰り返す私の唇を、部長の唇が塞ぐ。喉の奥まで刺激するキスをされながら部長の指で秘芯をクリッと摘つままれると、腰から目の奥まで電気が流れたような痺しびれが走った。

「ふうっ、あ、いつ……ああああっ」

体の力が抜けた瞬間を狙ったかのように、私の腰を掴んだ部長が一気にその距離を詰めた。お尻に部長の腰が当たったと思うのと同時に襲ってきた激痛。

我慢できずに体を強張こわばらせると、部長は私をぎゅっと抱きしめてくれた。

「痛いよな？ ごめんね。やっぱり初めての子に俺のはきつかったかな……」

「大丈夫ですから、あの、部長の好きなようにしてください」

いくら経験がなくなつて、入ったら終わりじゃないことくらいは知っている。それによつて襲ってくるだろう更なる痛みを覚悟しながら見上げると、立花部長がうつすら額に汗を浮かべながら微笑んでいた。

「だから逸人だつて。いいんだよ、こうして美奈の中にいるだけで……俺は十分気持ちいいから」
そう言うと、部長は挿入したものを抜き差しすることなく、グイッと押し付けるようにして腰を回した。すると部長の腰で秘芯が潰され、部長を呑み込んでいる場所がさらに潤うるいを増す。入れられた熱い棒はそのままに、少しかだけ体を離れた部長は、私の胸の頂いたに吸いついた。

「んやっ、……はあ……」

歯で軽く噛まれたかと思うと、口から出されて空気に晒さらされる。熱い部長の体温に慣らされていた頂が、冷たい空気にピンと尖つていった。より摘みやすくなったその場所を、部長の舌が這う。存在感抜群のお腹の中のもの時々震えるのを感じながら、本当にこれでいいのかと不安になつてきてしまう。

「あの……あつ、……ぶつちよ……お」

「ん……？」

「私……大丈夫なので、あの、好きなようにしてください……」

「……っ、はあ、俺は本当に気持ちいいんだよ。段々柔らかくなってきた美奈の膺が、俺のものを放さないって包み込んでいるのが堪らない」

部長が本当に嬉しそうな顔をしているのが気恥ずかしくて、彼の顔が見られなくなった。胸を苛める役目を指に譲り、部長の舌が次の標的に決めたのは私の唇だった。

深く合わせた証のように、私の口の端から二人分の唾液が流れていく。それを感じながら、私も激しいキスに夢中になっていった。

時折きつく秘芯を摘まれると、その刺激で腰が揺れる。すると私の中の部長も震えた。部長を呑み込んだ場所からちゅぷちゅぷと水音が聞こえる。それを意識の遠くで感じながら、幸せな夢に酔いしれた――

繰り返されるたくさんのキスと、胸や秘芯への愛撫。そしてたまにゆっくりと腰を回される。

それはとても長い時間だったようにも思うし、とても短い時間だったようにも思う。

最初に感じた痛みがどんどん遠のいて、私はただただ気持ちよくなっていた。

「んっ、んうっ、う……はあ……」

「美奈……好きだよ……美奈……」

何度も耳を食みながら囁く部長の呼吸が、次第に荒くなっていく。ふいに力いっぱい抱きしめられたかと思うと、私の中の部長が震えた……

私の中でビクビクと震えていた部長の熱がやがて大人しくなると、荒い呼吸のまま体を離される。

そして両足首を持ち上げられたかと思うと、そのまま大きく足を広げられて、部長を受け入れたばかりの秘所を間近で見られた。

部長に足を上げられた拍子に自分の中からコポリと何かが流れていくのがわかった。それを部長に見られるのが恥ずかしくて堪らない。嫌がって足を閉じようとものがくけど、がっしり掴んだ手は離れてくれない。

「やだあつ、見ないでください……」

「何故？ ああ……美奈の中から俺のと美奈の初めてが混ざり合って出てくる……堪らない……」

嬉しそうな声でそう言うと、立花部長が私の秘芯を舐めしやぶり始めた。じゅるっ、ぐちゅっとな響く水音。許容量をオーバーした羞恥心に私はとうとう泣き出してしまった。

「もうやだあつ、放してっ！ やあーっ！」

「ああつ、ごめんっ、俺が悪かったから泣かないで」

私の泣き声に慌てて顔を上げた部長が、宥めるように顔中にキスを落としてくる。それを感じながら、本当に限界だった私の意識はブラックアウトしたのだった。

+

そんなことを思い出した私は、床に座り込んだまま、もう一度今いる部屋の中を見渡してみる。さっきは気付かなかったけど、自分の部屋とは明らかに違う内装――どどん怖くなってくる。

（昨日のは夢、そう、夢だったはず。なら、ここはどこ？ 飲み会の時にたまにお世話になる由理さんの部屋とも違う。微かに香るコロン……）

心臓が尋常じやなく激しく鳴っている。すると、ふいにさっきまで聞こえていたザーっという雨音みたいなものがしなくなつた。少し間をあけて、今度はすぐ近くで扉が開く音……そしてそこから入ってきたのは、ここにてほしくないと願ひ続けた人だった。

「おはよう美奈。そんなところに座り込んでいたら寒いだろう？」

ズボンだけを穿き、上半身を惜しげもなく晒している部長は、優しく微笑みながら近付いてくると、呆然とする私を軽々と抱き上げてベッドへと戻した。

「あ……の、わ、私……」

「ん？ どうした？ ああ、体が気持ち悪いかな？ 昨夜軽く拭いたんだけど。今用意してきたから、一緒にお風呂に入ろうか」

そう言うのと、また私を抱き上げてしまう。夢にまで見たお姫様抱っこだが、感情がついていかない。必死に下ろしてくれと頼んだけど、部長は笑うだけで聞いてくれなかった。

ようやく下ろされたと思つたら、もう浴室。洗ってあげるといふ部長から必死に逃げながら、とにかく謝つた。

「違うんですつ、すみませんつ。言い訳にもならないですけど、き、昨日は酔つてて夢だと思つててっ！ あいつ、あいつ私っ！ んぐっ」

腕を掴まれ勢いよく部長に引き寄せられると、キスで言葉を止められた。そしてそのままきつく

抱きしめられる。

「言わないでいい、わかつてる。美奈は川崎が好きなんだろう？ だが、簡単に諦められるような思いなら、俺は引かない。したいと言つていたデートも、キスも、セックスも、全部俺と経験すればいい。全部俺が教える」

「かつ川崎主任!? ち、ちがつんんう」

「美奈、俺を見てくれ。君が好きだ」

「んんん〜？」

この時私は、人間は驚きすぎると思考が止まるのだと知つた。

貪るようなキスの中、少しずつ思考が動き始めた私は、とりあえず部長の誤解を解かなければと思ひ、彼から体を離そうとした。それを部長は拒否していると取つたようだ。余計にきつく抱きしめられたあと、何とかつま先で立っていた両足を広げられる。動いた拍子にまた何かを零す秘所に、熱く滾つた部長のものがあてられた。

「美奈……もう一度抱きたい。美奈、俺を受け入れてくれ……」

「あ、あう」

「嫌？」

好きな人に抱かれるのが嫌なわけがない。反射的に首を横に振ると、すぐさま部長のものが私に押し入ってきた。昨夜初めてを済ませたばかりのその場所が、微かにひりつく痛みを訴えただけ、嬉しさが勝つてしまい気にならなかつた。

昨夜と違って激しい腰の動きに、部長の首にしがみつくことで何とかついていく。浴室の中に肉を叩くパンツパンツという音と、ぐちゅっぐちゅっという卑猥な音が響く。

「美奈っ、好きだっ、美奈っ」

そうしてきつく抱きしめられ、部長のものが震えるのを感じた私は、戸惑いと幸福感の中……二度目のブラックアウトを経験した。

結局部長の誤解が解けたのは、その日の夕方だった。

お昼ごろに目が覚めた私はすぐに誤解を解こうとしたのだが、なかなか私と部長の会話が噛み合わず、しかも部長は体での会話を仕掛けてきて……。なんとか落ち着いた部長と、ゆっくり話せたのが夕方だったのだ。

そして、気持ちを通じ合って盛り上がった部長にまた挑まれ――

へろへろになりながら車で家に送ってもらったのだが、玄関先で送ってもらったお礼を伝えているところを母に見つかってしまった。

焦る私を尻目に部長と母が意気投合。私が知らないうちに、何故か我が家では私に婚約者ができたことになっていたんだけど……

それはまた、別のお話。

変態はチャンス逃がさない おまけ

初体験を終え、気を失ってグツタリと横たわる美奈をしばらく見つめたあと、逸人はおもむろに己の滾る肉棒を彼女の秘所に挿入した。

彼女の腰をしつかりと掴み、そのまま激しく腰を叩きつける。微かに漏れる美奈の声を聞きながら、意識のない状態でも己を熱く締め付ける膣を堪能した。

日本に帰国してすぐ、会社で一目見た時から可愛いと思っていた。

明るく笑う姿も、たまに見せる悲しそうな姿も、全てが可愛くて仕方がない。どんな仕事も一生懸命やり、無茶を言われても引き受けてしまうお人よしなところも逸人を魅了した。

同期の本木をダシに話しかけることには成功したものの、そこから先へはなかなか進まない。何とか接点を持つと色々画策したが、どうにも上手くいかずに数ヶ月が経ってしまった。

何度食事に誘っても断られ……。もしかしら付き合っている男がいるのかもしれないと思い始めていたが、どうやら恋人はいないものの、好きな相手がいるらしい。

それを知った直後は正直動揺したが、すぐに考えを改めた。そんなことはたいした問題じゃない。と。逸人のことしか見られないように縛りつければいいのだ。心も……体も……

美奈が酔っていることなどわかっていた。そんな彼女を半ば強引に家に連れてきたことも自覚し

ている。だが初めてやってきたチャンスを手放すほど、逸人はいいい人間でも馬鹿でもなかった。当然夢現な美奈を抱いたことに後悔もない。

そうして今、彼女はこの腕の中にいる。

もともと美奈を相手に避妊をするつもりはなかった。美奈の性格ならたとえ他に好きな男がいたとしても、子供ができたら逸人と結婚するだろう。

ただ、美奈の言質を取るために一度引いた。言質が取れなければ、美奈が自ら欲しいと言うまで、快楽を与え続けるつもりだった。そんな逸人に美奈は大丈夫と繰り返し返した。あの顔は本当に妊娠の可能性を感じていない顔だった。その顔を見て逸人が思ったことは――

(タイミングが悪かったか)

その一言だった。だがすぐに思い直した。たとえ安全日だとしても、もしかしてということもある。そんなものは関係ないほどに注ぎ込めばいい。

カーテンの隙間からうつすらと朝日が差し込むまで、美奈の膣内に欲望を注ぎ込んだあと、ようやく逸人が体を離すと……美奈の体内から、収まりきらない残滓が流れ出した。長い時間開かれていたせいで赤く腫れている場所から、おびただしいほどに出てくるそれを満足げに眺めると、美奈の下腹部に愛おしげに口づける。

(孕んでいればよし、そうでないなら毎日でも注いで、できるだけ早く捕まえる)

あれだけ激しく抱いたのに、一度も目を覚まさない美奈の……ここ数ヶ月焦がれてやまなかった唇を愛でながらうつそりと囁く。

「今はゆっくり眠るといい……次に目が覚めたら容赦はしない。愛しているよ、美奈」

遅くに発病したこの病は、止まることなく逸人を侵していた。

初恋に身を焦がす男が、愛する女性を真実手に入れるのは、もう少し先のお話……

第二話 変態は恋人を甘やかす

思いもよらないことが起こった飲み会の翌週、月曜日の朝。

私、森下美奈がいつものように会社の更衣室で制服に着替えていると、なんだかやけに周りからの視線を感じた。

最初は気のせいかもしれないって思っていたけど、たまに小さく私の名前も聞こえてくる。我慢できなくて声がしたほうをチラッと見ると、目が合った人たちに勢いよく顔を逸らされた。

（なんだろう？ 私、何かしたかな……）

この状況は、小さい頃の虐められていた記憶を思い出させる。思わず暗くなりそうな気持ちを何とか切り替えて、足早に総務のフロアに向かう。だけど……その間にも廊下ですれ違う人たち、特に女性たちが、私をじつと見て、そして顔を背けていく。嫌な感じで胸が騒ぐ中、ようやく総務のフロアに着いた――

毎朝、私が出勤する時間にフロアにいるメンバーは決まっている。

経理課長と主任、そして数人の男性社員だ。他の部に比べると、うちは圧倒的に女性の比率が高いんだけど、この時間にいる平の女性社員は私だけ。

お財布とポーチを机の引き出しにしまつて、まずは先に出勤していたみんなにお茶を出し、給湯室を掃除して冷蔵庫の整理をする。次に全ての会議室と応接室のテーブルを拭き、花瓶の花と水を替えた。それらを終えて自分の席に戻った時には、隣の席の由理さんが来ているのが毎朝の光景。

「おはようございます」

「おはよう、美奈ちゃん」

朝から見惚れるほど綺麗な笑みを浮かべる由理さんで目の保養をしながら、パソコンをたち上げる。すると……由理さんが顔をしかめ、これもまたいつものように言ってきた。

「また堀川、来てないのね。本当は朝の雑事は彼女の仕事なのに」

「でも別に誰がやっても同じですから」

「美奈ちゃんがそうやって甘やかすから、あの子が図に乗るのよっ」

我が総務部の新人には、毎朝他のみんなより少しだけ早めに来てやることがある。それがさっき私が終わらせてきた『朝の雑事』だ。

今年の総務の新人は堀川さんという女性だけど、彼女は毎日遅刻ギリギリにやってくるからこれができない。「もっと早く来なさい」と課長や主任がいくら注意しても聞かない彼女は、系列会社の常務の姪らしい。

それを初めて聞いた時は、なんだか遠い縁故だなあと思っただけで、仕事には関係ないと思っていただけ……うちの部長はそうは思わなかったらしい。言葉は悪いけど、何かにつけて彼女を最前（ひいき）している。仕事でミスをした彼女を注意していた主任を怒鳴りつけた時、部内全員が白い目で

部長を見たのは記憶に新しい。

とはいえ、春が来たらまた新人が来るだろうし、もともと早めに出社しないと落ち着かない性分の私にとって、朝の雑事は苦じゃない。私がやるせいで余計に彼女が反省しないんだと、由理さんにはよく叱られているけど……

（由理さんの言っていることはもっともだと思うんだけど、誰もやらないっていうわけにもいかないし……）

いつものように由理さんとそんな話をしている間にも、ちらほらと女性社員たちが出社してくる。彼女たちはみんな私たちを見たあと、由理さんに挨拶をしていく。

「本木さん、おはようございまーす」

というように、必ず由理さんだけに。私が挨拶しても、こっちを見てもくれない。

（どうして？ 先週までこんなことなかったのに……）

更衣室でのこともあって、また不安な気持ちの胸の中で渦を巻く。そんな私の横で、由理さんも彼女たちの態度に不思議そうな顔をしていた。

「なんなの？ あの子たち、なんか変じゃない？」

「そうですね……私、何かしたんでしょうか……」

「そんなに気にすることないわよ、あの子たちって朝はいつもあんな感じだし。とはいえ、いい大人が会社であの態度はないわ」

（由理さんはそう言うけど、気にしないでいるなんて無理だよ……）

一週間が始まったばかりなのに、気が重くて仕方がなかった。

「立花部長とお付き合いすることになりましたっ」

由理さんと近くのお蕎麦屋さんでお昼をとっている時に、勇気を出して報告した。

当然驚かれるだろうし、私と部長では釣り合わない、なんてことを言われる覚悟もしていた。もしかしたら冗談だと思われるかもしれない。だって自分でもまだ信じられないんだから、他の人なら余計にそうだと思うんだ。

夢のような一夜のあと、正気に戻った私はテンパった。それはもうすぐく。

そんな私に立花部長は好きだと言ってくれた。そしてまたむにゃむにゃをしたあと、私を家に送ってくれ、その時偶然会った母に真摯な態度で挨拶してくれたのだ。そんなこと初めてだったからなんだか恥ずかしかったけど、とても感動した。母もいい人を見つけたなと言ってくれた。

実は、昨日部長から電話が来た時に、会社では付き合っていることを秘密にしてほしいとお願いしておいた。付き合っているのが私だなんて知られたら、立花部長のマイナスになってしまう気がしたから……。隠す必要はないって譲らなかった立花部長も、私が必死にお願いしたら最後にはしぶしぶ了承してくれた。

でも、いつもお世話になっていて、よく私に恋愛をしろと勧めてくれていた由理さんには、ちゃんと報告をしなくちゃと思った。だから二人だけになれるお昼の時に言おうと、朝から決めていたのだ。

私の報告を聞いた由理さんは、一瞬動きを止めたあと……深いため息をついた。

「とうとう捕まっちゃったのね……。本当にいいの？ 美奈ちゃん。彼氏が欲しいなら私がもっともつともーつといい男を紹介するわよ？」

「立花部長と私じゃ釣り合わないことはわかってるんです……。でも私っ」

「違うわよ！ 立花に美奈ちゃんはもったいないと言っているの！ あんな性格悪い男に捕まっちゃうなんて！ てつきり立花がふられると思っていたのにー！」

「由理さんは……その、信じてくれるんですか？」

「何が？ はあ……きっかけは何？ 金曜の飲み会？ さてはあの時、井上課長を味方にして私を出し抜きやがったわねっ、あいつーっ！」

「井上課長ですか？」

「そうよっ。井上課長ったら、私に美奈ちゃんはタクシーで先に帰ったとか言いやがったのよっ！ うちに泊まりに来る約束だったのにおかしいなって思ったのにーっ！ まんまと騙だまされたーっ！ 悔しいーっ！」

テーブルで見えないけど、由理さんが今、足をバタバタさせているのはなんとなくわかった。

由理さんは……私と立花部長が付き合っても、おかしくないって思ってくれてるのかな？

ホッとした途端に、嬉しさが込み上げてくる。

兄じゃない私にとって、由理さんは姉みたいな人だから、立花部長と付き合うことを由理さんがどう思うか、正直すごく不安だったのだ。

しばらく唸っていた由理さんは、いきなりガバツと顔を上げると、険しい表情で私に聞いてきた。

「……美奈ちゃん、立花に流されたりしていない？ あんな男好きじゃないのに、うやむやのうちに何かされて、とかじゃない？」

「ええっ!?」

「まさかあの野郎……酔った美奈ちゃんを無理やり……」

「そっ、そんなことないですから！」

「だって美奈ちゃん、あいつに興味があるそぶりなんてなかったのに……」

「あの、その、実は前から憧れていたんです……」

「そうなの!?」

「は、はい」

目を丸くした由理さんに、俯うつむきながら立花部長に惹かれたきっかけなんかを話し始める。由理さんは時々唸りながらも最後まで聞いてくれた。そしてなんでかさつきよりも興奮した様子で私のほうに身を乗り出すと、私の右手を両手でギュツと握り締めてくる。

「いい？ 美奈ちゃん。立花と別れたくなったらすぐに私に相談するのよっ！ どんな手を使っても私が必ず、必ず別れさせてあげるからねっ！」

「ははは、すぐにふられちゃうかもしれないですけどね」

「すっごく残念だけど、それはないわ」

きっぱりと言い切ってくれるのは由理さんの優しさだろう。

好きだと言ってくれた立花部長の言葉を疑うわけじゃない。私は自分のことが信じられないんだ。あんなに素敵な人を、私はいつまで繋ぎ止めておけるだろうって考えると、どうしたってマイナスなことしか想像できなくて……

とりあえず、失敗続きのダイエツトをまた頑張ろうと、お昼のかけ蕎麦^{そば}を半分残すことから始めることにした――

↑

「ねえ、あの噂聞いたあ？」

「あの噂って何よ？」

「先週の飲み会で立花部長が女をお持ち帰りしたって話い」

「嘘っ！ 誰よっ!？」

お昼をとったあと、由理さんと別れて一人でトイレに寄った。トイレを済ませ、さて出ようと個室のカギに手をかけたところで、ふいに聞こえてきた声に動きを止める。聞こえてきた話が、私に大に関わっていたからだ。

このまま話を聞いていてもいいことなんてないとわかっている。けれど、今出ていくほうがまずい気もする。私が迷っている間にも、外の女性たちの会話は続いていった。

「それがさあ、私も友達に聞いて嘘でしょって思ったんだけどお、森下さんらしいよお」

「森下って……まさか総務の？」

「そうそう」

「あの子ブタ？ ……ふっ、あつははは、ないない。あんた騙^{だま}されてるって。立花部長があんな子ブタ相手にするわけないじゃん」

「でもおホントの話らしいんだよね。企画二課の友達にも聞いたけど同じこと言ってたしい。なんかあ森下さんのお酒に酔って具合が悪くなったからって、立花部長が送っていったってえ」

「何それ絶対作戦でしょ。立花部長かわいそ」

「でもお、立花部長が女を送っていくなんて初めてじゃない？ うちの飲み会だって、忙しいって言ってなかなか出席してくれないからさあ。参加してる時はみんな必死で誘うのに、いいつつも二次会も出ずに一人で帰っちゃうじゃん」

「だから、部長の中でも子ブタは女じゃないってことなんじゃないの？ 森下さんはないって、あれは絶対処女だよ。彼氏がいたことなんてないんじゃないの？」

「でもお、部長ってば森下さんをお姫様抱っこで運んだらしいよお。それを……総務の何ていったっけえ？ あの縁故入社でかい顔してる頭悪そうな女が見ててえ、飲み会にいた女性社員たちに話したんだってえ。最初はみんな冗談だと思って信じてなかったらしいんだけどお、二人が途中で帰ったのは確かだからあ……もしかして本当なのかなあってみんな噂してるよお」

「森下さんをお姫様抱っこ？ ないないそれ絶対嘘だって。いくら立花部長でもあの体を持ち上

げるのは無理でしょ。みんな騙されたんだよ」

「あんな酷いね。森下さんのこと嫌いなわけ？」

「子ブタのくせに立花部長と噂になるつてのがムカつくだけ」

「ホントに酷い」という笑い声とともに去っていく足音。それを聞きつつ、私は個室の扉におでこを付けた状態で動けなくなっていた。

（なんで女ってというのはトイレで噂話をするのかな……？ 誰が聞いているかもわからないのに……。やっぱり由理さんが優しいだけで、私と立花部長が付きあっているって聞いたら、普通はみんな、こんな風に思うんだろうな……）

秘密にしておくことにしてよかった。噂だけでこれなら、もし本当に付き合っているなんて知られたら、きっと部長に迷惑がかかる。

その時、ポケットに入っていた携帯が震えた。画面を見ると、なんてタイミングの良さなのか、立花部長からメールが来ている。開くと、『今日の夜は会えるかな？ 俺は二十時過ぎちゃうかもしれないんだけど、できれば一緒に夕飯を食べよう？』と、お誘いの言葉が書いてあった。そのメールに、悩んだけど断りの返信をする。

『すみません、今日は友達と約束があるんです。遅くまで大変ですね。帰り道に気を付けてください』送信完了の文字を見ながら、溢れてくる涙を堪えるのに必死だった。

「ウソ……ついちゃった……」

（泣くようなことは何もない。今までだってこんなこといっぱいあったじゃないか。泣くな、泣く

な、泣くな）

両手で握り締めた携帯を額に付けたままきつく目を閉じていると、また携帯が震えた。のろのろとメールを開く。それは部長からの返信だった。

『それは残念。美奈のほうこそ気を付けなさい。あまり遅くならないようにして、帰り道は明るい道を通ること』

こんなに優しい言葉をかけてくれる人に、嘘をついてしまった。そう思った瞬間、とうとう涙が零れてしまった。

でも……もし一緒に食事をしているところを誰かに見られたら？ 付き合っていることを知られたら？ きつと立花部長は趣味が悪いとみんなに言われるだろう。私のせいで馬鹿にされるかもしれない。

そうしたら……そうしたら、立花部長も私とのことは間違이었다と離れていってしまうかもしれない……

結局、私は立花部長のためなんて言いながら、自分のことしか考えていない……

「私って最低だ……」

手が届かない人だと思っていたから、幸せな夢が見られた。だけど好きな人に抱きしめられる幸せを知ったら、次はその腕を失うことに怯えるようになった。

「こんなじゃ……立花部長にふられるのも時間の問題かな」